

氏 名	リム ブン ホック LIM BOON HOCK
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 12 号
学位授与の日付	平成 16 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	Rural-urban Industrial Shift: A Study on the Current State of Salt Production in Bangladesh (農村から都市への産業移動—バングラデシュにおける製塩業の現状分析—)
論文調査委員	(主 査) 教 授 山 田 勇 教 授 田 中 耕 司 助 教 授 安 藤 和 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、世界最貧国のひとつであるバングラデシュを対象として、貧困の背景となる要因について、バングラデシュの社会経済的な側面から明らかにすることである。具体的には、製塩産業において近年顕著にみられる、農村部から都市部への工場移動の原因を地理的に分析し、産業配置の変化と人々の経済活動との関連性を中心に考察することである。

近年急速に起こった製塩業をはじめとする産業の大都市への集中は、農村部の産業の衰退、失業率の上昇に大きな影響を及ぼしている。一例を挙げると、製塩業は、従来、バングラデシュ中部の農村部であるチャンプールなどで盛んであったが、1990年代以降は衰退の一途をたどり、代わって首都ダッカやチッタゴンのような大都市に大規模な製塩工場が建設されるようになった。さらに1980年代末以降は、ミャンマーから低価格で良質な粗塩が大量に密輸されるようになり、小規模に行われていた農村部の製塩業は大きな打撃を受けることになった。

そこで、本研究の目的は、第一に、バングラデシュにおいて製塩工場が農村部から都市部へ移動した要因を明らかにし、第二に、バングラデシュとミャンマーの国境地帯における粗塩の密輸が、塩生産者と村人の生活に与えた影響を分析することにある。本論文における主要な問題は、1) なぜ特定地域の製塩活動が活発化する一方で、他の地域では衰退するのか、2) ベンガル湾で優良品質の粗塩の生産が可能であるにも関わらず、なぜ低品質の粗塩がバングラデシュで生産され続けるのか、3) なぜ塩のように単価が安く、容積の大きい原料が、ミャンマーから密輸されているのか、の3点である。

これらを明らかにするために、1998年からのべ1年間にわたって、チャンプール(Chandpur)とチッタゴン(Chittagong)、ナラヤガンジ(Narayanganj)、コックス・バザール(Cox's Bazar)の4地域でフィールド調査を行い、製塩技術の歴史的変遷、工場の数・経営形態の変化、雇用者と被雇用者の属性の変化などについて分析を加えた。

その結果、以下のことが明らかとなった。まず、1) の問題については、高速道路の建設によって、製塩工場の位置が必ずしも粗塩生産地の近隣である必要性がなくなったためと言える。例えば1950年代に建設されたコックス・バザールの製塩工場は、粗塩生産地に近接して建設され、続いてチャンプールの製塩工場は、粗塩を運搬する水路に沿って建設された。しかしながら1980年代半ば頃に高速道路が整備されると、より短時間で精製した塩を分配できるようになったため、製塩工場は大市場を有するチッタゴンやナラヤガンジなどの都市部に配置されるようになった。

また2) の問題に関しては、粗塩生産者の経済状況が大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。というのは、粗塩生産者の多くが小作人であるため、良質の粗塩を生産するための新しい方法を適用することが困難であり、品質の改善よりは、むしろ生産量の増加を重視している現状があった。さらに、利用可能な農地が限られているため、生産効率の高い方法を選択することが困難であることが明らかになった。

3) の問題に関しては、ミャンマーの粗塩は、バングラデシュの国内で生産されたものに比べて、低価格で良質であるためと言える。1980年代のミャンマー国内の政治的状況の変化にともない、ミャンマーでは、強制労働による高品質の粗塩が大量生産されるようになり、国内消費後の余剰分がバングラデシュに密輸されるようになった。密輸された粗塩は、チッタ

ゴンやナラヤガンジに運ばれ、ここで精製されて全国に流通している。そのため、チッタゴンやナラヤガンジにおける製塩活動はますます活発化し、逆に、経済的状況により、ミャンマーからの粗塩を現金で購入することが不可能なチャンプルやコックス・バザールの製塩業は衰退の一途をたどっている。バングラデシュの粗塩生産者は、ミャンマーから密輸される低価格の粗塩と競争することを余儀なくされているのである。

以上のことをまとめると、次の2点が指摘できる。まず高速道路の整備により、製塩工場の配置を決定する要因は、従来の粗塩生産地との距離から、大市場の有無へと変化した。これによって、バングラデシュの製塩工場は、農村部から都市部へと移動した。さらにミャンマーからの粗塩の密輸によって、大都市における製塩工場の規模は増大し、上述した産業移動の傾向を加速化させたのである。

論文審査の結果の要旨

東南アジアと南アジアの中間地点に位置するバングラデシュは世界の最貧困国のひとつとして、多くの社会経済的問題をかかえている。これまでの多くの研究が農業・農村中心であったのに対し、本論文は、この貧困問題の現状を解明するひとつの手がかりとして、バングラデシュで長くおこなわれてきた製塩業をとりあげ、そこに潜在する問題点に焦点をあてている。

バングラデシュの独立は33年前ではあるが、ベンガル地域の歴史は古く、2000年以上にわたって製塩業は農業と同じく綿々とつづけられてきた。製塩業はムガル朝時代までは、それほど組織だった産業とはなっていなかったが18世紀から19世紀のイギリス植民地時代には重要な産業となり、ベンガルデルタの多くの人々を支えてきた。本論文はこういった歴史的な背景の詳細を記述することに始まり、現在のバングラデシュ製塩業のかかえる問題をフィールドワークによる現地調査と文献資料により明らかにしてきた。これまでほとんど学術的な調査が行われなかったバングラデシュの製塩業に光をあて、調査の困難な国境地帯にまでふみこんで調査をおこなった。以下に本論文の骨子となる重要な知見についてのべたい。

- 1) ベンガルデルタの製塩業の歴史をイギリス植民地時代の文献を詳細に検討、整理し、これまでインドの一部分としてしか扱われなかった製塩業の重要性を示した。
- 2) 1990年代以降、バングラデシュの製塩業では農村部から都市への工場移動がおこっている。かつて農村部の人口を支えていた製塩業の都市への移動によって、農村部の貧困化はさらに深まり、大きな社会問題となっている。この製塩業は1950年代にはデルタの粗塩生産地に近いコックス・バザールや水路を使って粗塩を運搬できるチャンプルなどに位置していた。しかし、最近の高速道路の建設にともない、より消費地に近いチッタゴンやナラヤガンジなどの都市部に配置されるようになった。インフラの整備がかつての生産地を移動させた大きな要因となったことを現地調査と資料によって検証した。
- 3) バングラデシュの製塩業は新しい技術を開発してきている。にもかかわらず、それらが普及しない原因として、粗塩業者の多くがきわめて貧困な小作人であることを示した。狭い農地と資金のなさから、政府からの指導を実行することができず、昔からの方法を維持する以外にない小作人の現状が詳細なインタビューによって明らかにされた。
- 4) バングラデシュ国内の製塩業に大きな影響を与えているのが隣国のミャンマーから輸入される低価格の密貿易粗塩である。バングラデシュよりもさらに貧困な経済状況にあるミャンマーでは1980年代以降、大量の粗塩生産がおこなわれ、バングラデシュへ輸送されるようになった。これらの粗塩はチッタゴンやナラヤガンジに直接おくられ、そのため都市部の製塩業が発展する。一方、資金的にミャンマーの粗塩を購入できない農村部の製塩業は衰退していく。この過程がきわめて調査の困難な越境貿易地帯での現地調査によって明らかにされた。
- 5) これらの現地調査の分析を通して、バングラデシュの製塩業の推移がインフラの変化にともなう大消費地への接近と、ミャンマーからの粗塩流入による原材料の補給が大規模製塩業地帯をさらに発展させていることを明らかにした。

以上のように本論文はこれまでほとんどとりあげられなかったバングラデシュの製塩業の推移について、歴史的な文献調査とインタビューならびに参与観察による現地調査により、明らかにした。この論文によりバングラデシュのデルタ地帯を支える重要な産業である製塩業の現状が明らかになり、その貧困の原点を明確にすることができた。また、南アジアの東端にあるバングラデシュが、東南アジアの西端にあるミャンマーの影響を大きくうけて、あまり表にはあらわれない重要な交

易活動についてもふみこんだ考察をおこなっている。

このような研究例はこれまでほとんどみられず，農村調査のみが先行していたバングラデシュの地域研究に貢献するところは大きい。

よって，本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年3月26日，論文内容とそれに関連した事項について試問した結果，合格と認めた。